

日本語教育におけるスピーチ指導の可能性:
全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選の
取り組みを例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/32054

日本語教育におけるスピーチ指導の可能性

—全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選の
参加校の取り組みを例として—

深澤のぞみ（金沢大学人間社会学域国際学類）

陳会林（西安電子科技大学人文学院）

張鵬（西北大学外国語学院）

1. はじめに

日本語教育において、口頭コミュニケーション教育は最も重視される指導事項の一つである。従来の日本語教育では、口頭コミュニケーション教育の中に含まれる内容の詳細について、あまり意識してきていないという現実はあるが（ヒルマン・小林・深澤 2009）、いわゆる一般的な「会話」の指導から聴衆に向けて公的な発話を行う「パブリックスピーキング」¹⁾の教育まで、様々な教育実践が行われてきている。

パブリックスピーキングには様々なジャンルの口頭コミュニケーションが含まれ、たとえば、ビジネスの場や学会などでのプレゼンテーションや式辞スピーチ、会議での発言などがある。さらに、教育の場ではよくスピーチコンテストやスピーチ発表会などが実施されるが、コンテストでのスピーチも、パブリックスピーキングの重要な1つの要素であると考えられる。

本稿では、日本語教育においてスピーチコンテスト²⁾や発表会を目指して指導されるスピーチを取り上げ、実態を踏まえた上で、教育現場においてどのような効果があり、どのような課題があるのかを明らかにしようとする。特に、海外の日本語教育機関においては、スピーチコンテストの役割やそのための指導が、第二言語環境にある日本国内での日本語教育機関と違い、重要な役割を果たしているのではないかと思われるため、中国西北地区での日本語教育機関におけるスピーチ指導を例に取り上げ、実際にスピーチコンテストに出場した日本語学習者に対するイ

ンタビュー調査を行い、検討を加える。

なお、本稿でいう「スピーチ」は、「一定のまとまった内容のある話で、おもにスピーチコンテストやスピーチ発表会などで話されるもの」を指すこととする。

2. 先行研究

スピーチに関する先行研究は、スピーチそのものの意義やスピーチの内容や構成に関するものと、スピーチやスピーチコンテストの実施を扱うものと大きく分けられる。

まず、スピーチそのものを扱ったものとしては、土岐（2001）が挙げられる。土岐は、日本語の「スピーチ」という用語について、「独話」に近い使われ方をしており、様々なジャンルのスピーチが含まれていることを指摘している。そして、スピーチはそれを聞いてくれる相手のためにするものであるということを常に意識すべきだとする。さらに、スピーチとして話すということは、実はある内容について書くことでもあり、また聞き手を意識して自分の話し方を聞きながらモニターしているという側面もあるため、スピーチにおいては四技能が表裏一体化していると述べている。

和泉元他（2005）は、「専門日本語研修」の中で、外交官や公務員に対する職務上のニーズに応じてスピーチによる日本語発信指導を行っている」と報告している。日本語学習の初級段階から、日本語でまとめた話をするための練習を行うが、スピーチ特有の談話展開や語彙表現に注意を払いながら、内容のあるスピーチ作成が行えるようになることを重視し、そのために考案した教材の紹介を行っている。

スピーチを実際に指導する場合、日本語学習者が自分自身のスピーチを完成させることには集中するが、クラス活動としては、あまり活性化しないという問題が起こることがある。林（2010）は、実際に留学生に対してスピーチ指導を行うクラスで、とにかく留学生は自分のスピーチ以外には関心を示さないことが多いことを指摘し、これに対する対策として、聞き手の役割に気づかせる試みが、聞き手としての態度だけでなく、

話し手としての態度にも変化が現れたことを報告している。

またスピーチコンテストでの実践報告として、藤田・フランプ (2009) は、中国の重慶大学でピア・ラーニングの概念を取り入れ、スピーチコンテストそのものを日本語科の学生だけで運営させた試みについて報告している。同大学では1学期に1回スピーチコンテストを実施しているものの、学生たちには受け身的な態度が目立ち、何でも教師に頼りがちであったこと、一方、日本語力が非常に高い上級生たちの存在があり、その上級生と下級生が交流することで、学部全体の日本語レベルが高められると考えられたことが述べられている。グループでスピーチコンテストを運営し参加したことが、日本語力の上達にも結びついたことがうかがわれ、ピア・ラーニングとしてのスピーチコンテストの可能性を示唆している。

深澤・ヒルマン小林 (2012) は、海外で日本語教育に当たっている日本語教師にインタビュー調査を行った結果、海外での日本語教育では、スピーチコンテストへ日本語学習者を参加させることが、日本語を総合的に使用する機会として、そして日本語学習者のモチベーション強化にも役立つものとしてとらえられていることが明らかになった。第二言語環境である日本国内と違って、海外での日本語教育の現場は、日本語を使用する機会が十分でないことも多く、スピーチコンテストの役割はより重要なものであると思われる。

一方で、スピーチコンテスト自体は重視され、国内外で数多く実施されているという事実があるが、スピーチコンテストが日本語教育とどのように関わり、カリキュラムとどのような関連を持って実施されているのかなどの問題点を検討した研究はそれほど見当たらない。藤岡 (2009) は、多くの日本語スピーチコンテストが行われてきているアメリカ合衆国での調査を行い、コンテストでの審査基準が確立されていないことを問題視し、過去のスピーチコンテストにおける審査データを用いた分析を行っている。スピーチコンテストで学習者のどのような能力が求められ、評価されるのかを明らかにすることが、スピーチコンテストの日本語教育の中での位置づけを明確にし、意識化することにつながると思わ

れる。

3. 本稿の目的

本研究では、まず、中国で開催された全中国選抜日本語スピーチコンテストの予選に出場した学生を対象とした面接調査を通して、中国西北地区の各大学のスピーチ指導の取り組みとその効果を観察する。それから、筆者の一人が担当している西安電子科技大学のスピーチ指導の現状とこれまでの試みを分析して、日本語教育におけるスピーチ指導の可能性を検討する。

4. スピーチ指導に関する調査

4.1. 調査概要

本研究では、2011年の第6回全中国選抜日本語スピーチコンテスト西北ブロック予選に実際に出場した学生に対し、聞き取り調査を実施した。実際のインタビューは、ICレコーダーで録音し、それを文字化したものをデータとして使用した。なお、インタビューは、中国語で行われたが、本稿で引用する際には、日本語で翻訳したものをを用いることにする。

4.1.1. 第6回全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選の概要

全中国選抜スピーチコンテスト（以下、大会と略称）は日本経済新聞社、中国教育国際交流協会、日本華人教授会議が共同主催で、中国で最も規模が大きい日本語スピーチコンテストである³⁾。2006年に第1回が開催され、昨年まで計6回開催された。当大会はブロック予選と決勝戦があり、ブロック予選は中国国内の8のブロック⁴⁾でそれぞれ行われ、決勝戦は東京で行われる。各ブロックで成績が上位の2名は決勝戦に進出する。

第6回大会西北ブロック予選は2011年5月14日に蘭州大学で開催された。主催校蘭州大学は2011年3月29日付で、各大学に開催通知を郵送した。参加希望の大学は校内予選を開き出場者を選出することが義務づけられている。出場者はテーマの告知から西北ブロック予選の出場

まで最長で5週間程度の準備時間が与えられる。

西北ブロック予選にはテーマスピーチと即席スピーチの二つの部分がある。第6回大会西北ブロック予選のテーマスピーチのテーマは「日中の若者文化について」と「高齢化社会に向けて一私ができること」であり、出場者はその中の一つを選んで5分間のスピーチを行う。即席スピーチのスピーチ時間は3分間であり、テーマは出場者が登壇する10分前に告知される。

出場者は5週間の準備時間で、原稿の執筆・推敲から、校内予選の準備、テーマスピーチ・即席スピーチの訓練まで、すべて行わなければならないので、相当高いハードルであることが推測できる。

4.1.2. 調査対象者

本研究では、第6回大会の西北ブロック予選⁵⁾の出場者の一部(17人中の10人)を対象に、半構造化インタビューを実施した。表1にインタビュー対象者の概要を示す。以下、対象者と略す。

表1 インタビュー対象者⁶⁾

番号	所 属	出場時 年次	性別	録音時間	西北ブロック予選 成績 (17 人中)
No. 01	A 大学	3	女性	45 分 55 秒	1 位
No. 02	B 大学*	3	女性	55 分 00 秒	3 位
No. 03	C 大学*	3	女性	56 分 28 秒	5 位
No. 04	D 大学	3	女性	45 分 57 秒	6 位
No. 05	E 大学	3	女性	48 分 22 秒	7 位
No. 06	F 大学	3	女性	55 分 25 秒	9 位
No. 07	G 大学	2	女性	56 分 36 秒	10 位
No. 08	H 大学	3	女性	50 分 57 秒	13 位
No. 09	I 大学	3	女性	51 分 11 秒	14 位
No. 10	J 大学*	2	女性	71 分 14 秒	15 位
合 計				537 分 05 秒	—

なお、対象者の所属は、西安外国語大学、蘭州理工大学、西北師範大学、西北大学、長安大学、西安電子科技大学、西安外事学院、陝西師範大学、西安培華学院、新疆師範大学の10大学であるが、対象者の特定を避けるために、本稿では、A大学、B大学のように表すことにする。

筆者の一人は、出場者に対する指導を担当し、出場者の原稿執筆からスピーチ指導まで一通りのプロセスを経験した。本研究では、インタビュー調査に加え、その指導経験も振り返りながら、各大学のスピーチ指導の取り組みとその効果について考察した。

4.1.3. 調査内容

インタビューの内容は、前述したように半構造化インタビューの形で、こちらから大きい質問項目を提示し、それについて答えてもらい、関連する内容も自由に話してもらった。主な質問項目を、以下に示す。

- 1) スピーチコンテストに出場しようとした理由
- 2) 所属大学の校内予選までのスピーチ指導の実態（学内の定期的スピーチ大会の有無、テーマスピーチ原稿の添削の有無、スピーチ指導の有無など）
- 3) 西北ブロック予選の出場者を選抜するための校内予選の実施状況（リハーサルの有無、成績と感想など）
- 4) 校内予選が終わってから西北ブロック予選までの所属大学のスピーチ指導の実態（テーマスピーチの指導のあり方、即席スピーチの指導のあり方、期間、効果など）
- 5) 西北ブロック予選への出場（リハーサルの有無、成績と感想など）
- 6) スピーチ指導を受けて、振り返った感想

4.2. 調査結果

4.2.1. スピーチコンテストの参加歴と西北ブロック予選への参加動機

学外のスピーチコンテストとして、陝西省では、全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選のほか、陝西省大学生日本語弁論大会⁷⁾

が毎年開催されている。陝西省を除いた中国西北地区のほかの4省（自治区も含む）では、全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選しかないのが現状である。

表2は対象者10人のスピーチコンテストの参加歴を示したものである。

表2 スピーチコンテストの参加歴（10人中）

学内、外のスピーチコンテストに出場したことがない。	3人
学内のスピーチコンテストに出場したことがある。	4人
学外のスピーチコンテストの出場者選出のための校内予選に出場したことがある。	3人
学外のスピーチコンテストに出場したことがある。	2人

次に、表3に対象者10人の西北ブロック予選の出場動機を示す。

表3 スピーチコンテストへの出場動機（10人中）

大会を通して日本語力を高めたい。	6人
以前に学外のスピーチコンテストの出場者を選抜するための校内予選に参加したが選ばれなかったため、もう一度挑戦したい。	3人
参加するまでの特訓の緊張感と参加したあとの満足感が好きだ。どんな大会にも積極的に出場したい。	3人
他大学の出場者と競うことによって、自分の力を確かめたい。	2人
蘭州に行きたい。できれば西北ブロック予選を突破して東京にも行きたい。	2人
出場する積極的な気持ちはなかったが、たまたま予選でいい成績が出て出場することになった。	2人
即席スピーチが得意だと思っている。	1人
あがり症を克服したい。	1人
大会の出場歴は、今後の就職活動に有利である。	1人

これを見ると、対象者はスピーチコンテストに出場することによって、

日本語力を上げるための機会とみなしていることがうかがわれる。

4.2.2. 校内予選までの各大学のスピーチ指導の実態

4.2.2.1. 学内スピーチコンテスト

対象者の在籍大学 10 校のうち、学内のスピーチコンテストが定期的に行われているのはわずか 4 校である。また、学外のスピーチコンテストの出場者選抜のために行われる大会ではないため、学内スピーチコンテストのためのスピーチ指導は行われていない。すなわち、原稿の作成からスピーチの練習まですべて学生自らが準備している。

4.2.2.2. テーマスピーチ原稿の執筆

対象者の在籍大学 10 校ではいずれも、校内予選の前に原稿添削以外のスピーチ指導が行われなかった。

第 6 回大会西北ブロック予選のテーマスピーチのテーマは「日中の若者文化について」と「高齢化社会に向けて一私ができること」の二つがある。対象者 10 人のうち、4 人は前者を、6 人は後者を選んだ。それぞれの理由は表 4 の通りである。

表 4 テーマスピーチのテーマを決めた理由

日中の若者文化について	高齢化社会に向けて 一私ができること
興味があった	興味があった (2 人)
話す素材があった (2 人)	話す素材があった (3 人)
先生のアドバイスを受けた	最初は若者文化を書いたが、先生のアドバイスを受けてテーマを変えた
高齢化についての知識がなく、それより若者文化のほうが書きやすいと思った	若者文化のテーマは大きすぎる (3 人)

次に、原稿の作成について見てみると、10 人は、いずれも校内予選の前に原稿の添削を依頼していた。うち 6 人は中国人教師に依頼した後に、さらに日本人教師にも依頼したことがわかった (図 1)。

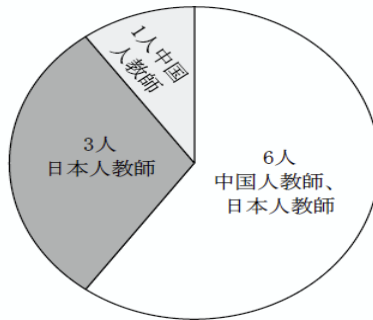


図1 添削を依頼した教師

西北ブロック予選出場者の原稿の添削作業は、校内予選が終わってからも続いていた。原稿の最終版を仕上げるまでの期間と添削回数は図2、図3の通りである。

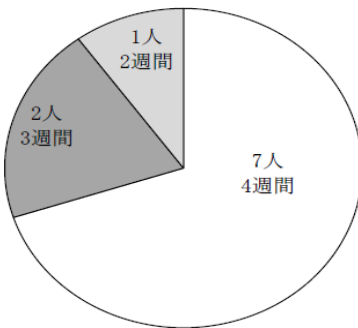


図2 最終版完成までにかかった時間

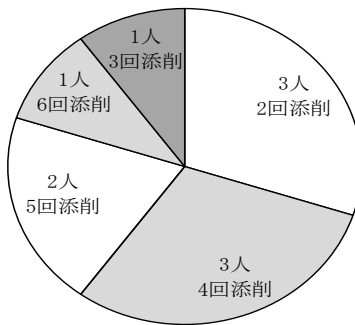


図3 添削回数

次に、原稿の執筆およびその添削について、(1) スピーチ原稿の構成、(2) 聴衆を引きつけるような事例の選び方、書き方、(3) スピーチ原稿の始め方と締めくくり方、(4) スピーチ原稿のスタイル（文体や決まった表現）、(5) 文法、(6) 語彙の適切さ、の6項目で、調査対象に指導を受ける前と受けた後の自己評価をしてもらった。自己評価は「よ

くできた」，「まあまあできた」，「どちらとも言えない」，「あまりできなかった」，「全くできなかった」，の5択方式で回答を求めた。調査の結果を数値化する際，上記の5択をそれぞれ4点，3点，2点，1点，0点を付けた。表5は，変化の大きさの順で，上記6項目の指導前と指導後の平均点を示したものである。

表5 原稿の執筆 指導前・指導後の自己評価（10人の平均値，4点満点）

	指導前	指導後	変化
スピーチ原稿のスタイル(文体や決まった表現)	1.9	3.4	1.5
聴衆を引きつけるような事例の選び方, 書き方	1.8	3.1	1.3
語彙の適切さ	1.9	3.1	1.2
スピーチ原稿の構成	2.2	3.3	1.1
スピーチ原稿の始め方と締めくくり方	2.1	3.1	1.0
文法	2.7	3.2	0.5

表5からは，スピーチ特有の文体や決まった表現や，スピーチとして聞き手にアピールできるような事例の選び方に関して，指導の効果を感じている対象者が多いことが見てとれる。それに対して，文法そのものについては，指導後にもそれほど大きい変化がないと回答している。やはりスピーチの指導を，それまでの授業の中で指導されていないこともあり，この指導で初めて習ったという印象を持つかもしれない。

4.2.3. 校内予選の開催

対象者の在籍大学10校のうち，校内予選の前にリハーサルを行ったのはわずか1校であった。対象者の校内予選の成績は表6の通りである。

大学の代表として西北ブロック予選の出場が決まったその感想を聞いたところ，10人のうち6人が「嬉しかった」と述べ，2人が「驚いた」，1人が「ホッとした」と述べた。また，10人のうち6人は，西北ブロック予選の出場が決まった瞬間にプレッシャーを感じたと回答した。

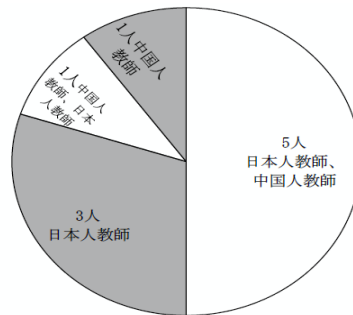
表6 対象者の校内予選の成績

番号	校内予選成績	番号	校内予選成績
No. 01	7 人中第 1 位	No. 02	5 人中第 1 位
No. 03	14 人中第 1 位	No. 04	25 人中第 1 位
No. 05	45 人中第 4 位 ⁸⁾	No. 06	6 人中第 1 位
No. 07	15 人中第 2 位 ⁹⁾	No. 08	2 人中第 1 位
No. 09	9 人中第 1 位	No. 10	15 人中第 1 位

4. 2. 4. 西北ブロック予選までの各大学のスピーチ指導の実態

前述したように、10 校はほとんど校内予選までは、添削以外の指導を行っていなかったが、校内予選が終わってから本格的にスピーチ指導を始めた。図 4 に示したように、原稿添削の指導（図 1）と異なって、スピーチ指導は最初から日本人教師主導で行われている大学が多いことがわかる¹⁰⁾。

図 4 西北ブロック予選
までに指導を受けた教師



次に、各大学のスピーチ指導の期間と回数を表 7 に示した。

スピーチ指導の期間や回数には、かなりの差があり、1 位の出場者は指導時間も回数も多いが、その他の出場者に順位との関連がどれほどあるかは、この資料だけでははっきりしない。

表7 各大学のスピーチ指導の期間と回数

番号	所 属	西北ブロック予選 成績（17人中）	期間	回数	総時間
No. 01	A 大学	1 位	2 週間	10 回	50 時間
No. 02	B 大学	3 位	2 週間	4 回	4 時間
No. 03	C 大学	5 位	4 週間	8 回	12 時間
No. 04	D 大学	6 位	4 週間	8 回	12 時間
No. 05	E 大学	7 位	4 週間	24 回	48 時間
No. 06	F 大学	9 位	3 週間	10 回	30 時間
No. 07	G 大学	10 位	4 週間	10 回	25 時間
No. 08	H 大学	13 位	2 週間	8 回	8 時間
No. 09	I 大学	14 位	4 週間	8 回	8 時間
No. 10	J 大学	15 位	4 週間	10 回	25 時間

4.2.4.1. テーマスピーチ指導の実態

テーマスピーチの指導について、(1) 聴衆の前で話す自信、(2) 聴衆を見ながら話す(目線)、(3) 速すぎず遅すぎず分かりやすい速さで話す。間を適切に取る、(4) 表情(姿勢、ジェスチャー)を豊かにして話す、(5) アクセント、イントネーション、の5項目で、対象者に指導を受ける前と受けた後の自己評価をしてもらった。自己評価は「よくできた」、「まあまあできた」、「どちらとも言えない」、「あまりできなかった」、「全くできなかった」、の5択方式で回答を求めた。調査の結果を数値化する際、上記の5択をそれぞれ4点、3点、2点、1点、0点を付けた。表8は、変化の大きさの順で、上記5項目の指導前と指導後の平均点を示したものである。

これを見ると、わかりやすい速さや間の取り方の指導に関して、効果を対象者が感じていることがわかる。

表8 テーマスピーチの指導 指導前・指導後の自己評価

(10 人の平均値, 4 点満点)

	指導前	指導後	変 化
速すぎず遅すぎず分かりやすい速さで話す。間を適切に取る。	1.8	3.3	1.5
聴衆の前で話す自信	1.8	3.1	1.3
アクセント, イントネーション	2.0	3.3	1.3
聴衆を見ながら話す (目線)。	2.2	3.5	1.3
表情 (姿勢, ジェスチャー) を豊かにして話す。	2.2	3.0	0.8

4.2.4.2. 即席スピーチ指導の実態

対象者に、即席スピーチの指導を受ける前の自分の不得意な点を回答してもらった。具体的には、「中国語で考えたことを日本語で翻訳しようとしてしまう」、「正確な発音ができない」、「正確な文法が使えない」、「適切な単語をすぐに思い浮かべることができない」、「緊張してしまう」、「短時間で正しく筋道を立てて話せない」という項目について、「とても心配」、「まあまあ心配」、「どちらとも言えない」、「あまり心配しない」、「全く心配しない」の5択方式で自己評価をしてもらった。調査の結果を数値化する際、上記の5択をそれぞれ4点、3点、2点、1点、0点を付けた。表9に示す。

表9 即席スピーチの困難点 (4 点満点で、10 人の平均値)

短時間で正しく筋道を立てて話せない。	2.9
緊張してしまう。	2.4
適切な単語をすぐに思い浮かべることができない。	2.1
正確な文法が使えない。	1.8
正確な発音ができない。	1.3
中国語で考えたことを日本語で翻訳しようとしてしまう。	1.1

これを見てみると、短時間でスピーチを構成のしっかりした話をするのに困難を感じている対象者が多いことがわかる。

次に、即席スピーチの指導について聞いた。(1) 誤りを恐れなくて話してみる、(2) 文法に気をつけながら話す(自己修正、長文の呼応)、(3) 発音が難しい単語や表現を避けて、分かりやすい言葉で言い換える、(4) 理解されているかを確かめて話す(話のテンポ、反復)、(5) 短期間で組み立てを考え、簡潔且つ明瞭に話す、の5項目で、対象者に指導を受ける前と受けた後の自己評価をしてもらった。自己評価は「よくできた」、「まあまあできた」、「どちらとも言えない」、「あまりできなかった」、「全くできなかった」、の5択方式で回答を求めた。調査の結果を数値化する際、上記の5択をそれぞれ4点、3点、2点、1点、0点を付けた。

表10は、変化の大きさの順で、上記6項目の指導前と指導後の平均点を示した。

表10 即席スピーチの指導 指導前・指導後の自己評価
(10人の平均値、4点満点)

	指導前	指導後	変 化
短期間で組み立てを考え、簡潔且つ明瞭に話す	1.2	2.6	1.4
誤りを恐れなくて話してみる	1.6	3.0	1.4
発音が難しい単語や表現を避けて、分かりやすい言葉で言い換える	2.0	3.0	1.0
文法に気をつけながら話す(自己修正、長文の呼応)	2.0	2.9	0.9
理解されているかを確かめて話す(話のテンポ、反復)	1.1	1.6	0.5

4.2.5. 西北ブロック予選の開催

対象者は、前述の準備を経て、西北ブロック予選に臨む。予選に出場

する前のリハーサルについて聞いたところ、10人のうち、5人は授業の前のクラスメートの前で行ったと答え、日本語コーナー¹¹⁾や日本語科教員の前でと答えた対象者が各1人、何もしなかったという対象者は3人であった。つまり、対象者10のうち7人は、西北ブロック予選に出場する数日前に、何らかの形で学内でリハーサルを行ったことになる。

表11は対象者10人の成績と感想を示したものである。これを見ると、即席スピーチ¹²⁾について言及している対象者が多いことがわかる。事前に入念な準備ができるテーマスピーチと違って、即席スピーチは、どのようなテーマが出されるかによっても、結果が大きく違ってくる可能性があり、日頃蓄積された実力が大きく影響する可能性がある。

表 11 対象者の西北ブロック予選での成績と感想

番号	成績	感 想
No. 01	1 位	スピーチのできは普通だった。1 位が取れて嬉しかった。
No. 02	3 位	びっくりした。でもそれほど興奮しなかった。
No. 03	5 位	心配していた即席スピーチは思ったより良くできた。
No. 04	6 位	心配していた即席スピーチは思ったより良くできた。大学の代表としての使命を全うした。
No. 05	7 位	即席スピーチの途中、途切れた時間が長すぎた。入賞できてびっくりした。
No. 06	9 位	即席スピーチの準備が足りなかった。自分で予測していたテーマは全然当たらなかった。
No. 07	10 位	①他大学の出場者との実力の差が実感できた。②莫邦夫教授の総評がとてもよかった。③全国規模の大会だから、競い合いの雰囲気がとてもすごかった。
No. 08	13 位	即席スピーチがテーマと外れたため、全然だめだった。
No. 09	14 位	即席スピーチは練習の時より下手だった。他大学の出場者との実力の差が実感できた。
No. 10	15 位	即席スピーチに何を話したか、記憶がなかった。他大学の出場者との実力の差が実感できた。

また、スピーチコンテストの性質上、他の出場者とスピーチを競うこ

とになるが、他大学の出場者との実力の差を述べるコメントが多くあり、自分の実力をモニターする機会となっていることもうかがわれる。

4.2.6. スピーチ指導を受けた感想

本節では、スピーチ指導を受けて振り返ってのコメントを紹介し、考察を加える。

前述のように、対象者のほとんどは4週間のスピーチ指導を受けた後、西北ブロック予選に臨んだ。現在、西北ブロック予選を開催して10カ月経つが、そのスピーチ指導を振り返っての感想を対象者に述べてもらった。まず、指導を受けたことを「とても楽しかった」(10人中9人)、「割に楽しかった」(1人)と振り返っており、全員がスピーチ指導を楽しんで受けていたことがわかる。具体的な感想の詳細を表12に示す。

感想は、大きく、日本人教師や日本人学生との交流との関連で述べられたものと、自分自身の成長との関連で述べられたものに分けられる。コンテスト出場が自分自身の成長につながるという感想は容易に想像できるが、日本人教師や学生との交流の機会ととらえられていることは、日頃の授業などだけでは深い交流が実現しにくい海外での日本語教育特有の事情があるかと思われる。

表12 スピーチ指導を受けた感想 (10人中)

日本人教師と仲良くなった。	3人
日本人教師のまじめな指導が印象に残った。	2人
失敗が怖く、出場を諦めようと思ったことがあるが、何回か練習しているうちに、自信がついてきて楽しくなった。	2人
途中は苦しかったが、振り返ると楽しい思い出になった	1人
練習の時に、周りの日本人留学生にいろいろ手伝ってもらった。とても感動した。	1人
毎回の指導は大会の時と同じように大きな教室の中で、テーマスピーチ、即席スピーチの順番で行った。緊張感と刺激が与えられ続けた。	1人

次に、スピーチ指導を受けることによって、対象者が日本語が上達したと思っているかどうかを聞いた。その結果、「とても上達した」(10人中4人)、「割に上達した」(5人)、「上達した」(1人)という結果になり、程度の差があるが、全員が上達に結びついたと考えていることがわかる。その上達の詳細は表13の通りである。

表13 スピーチ指導を受けて上達した点 (10人中)

日本語会話力が伸びた。普段の日本語授業や日本語コーナーでも余裕をもって話すことができるようになった。	6人
化石化した発音の癖が直った。	6人
普段気づかない文法の誤用を指摘してもらえた。	6人
作文の書き方がわかった。	4人
日本語の聴解力が伸びた。	4人
新しい語彙をたくさん覚えた。	4人
就職活動の際に、即席スピーチの面接項目があった。構成のしっかりしたスピーチができた。即席スピーチ指導を受けたお陰だと思う。	2人
日本人教師が毎日スピーチ指導に関連して何度も電話をかけてくれた。日本人からの電話に緊張しなくなった。	1人

では、対象者は、再びスピーチコンテストに出場したいと思っているのだろうか。これに関しては、「ぜひ参加したい」(10人中7人)、「参加したい」(2人)である。1人だけは「絶対にしたくない」と述べているが、ほとんどの対象者は、今後のさらなる挑戦への意欲を持っていることがわかり、スピーチコンテストがよい意味での達成感につながっていると思われる。

最後に、スピーチ指導の普段の授業への導入について、対象者の意見を述べてもらった。スピーチ指導は、授業外場でなされていることがほとんどであるが、授業へ指導を組み込む可能性があるのが課題となっているからである。

その結果、「とても賛成」(10人中8人)に対して、2人は「あまり賛

成しない」と答えた。

対象者の多くは、スピーチ指導を普段の授業に導入することに賛成している。その理由として、表 13 のようなことが挙げられた。

表 13 スピーチ指導を普段の授業に導入することの利点（10 人中）

強制的であっても、話す機会が与えられることが重要だ。	5 人
独話の能力が養成されていない学習者がほとんどである。	2 人
社会に出てから必ず独話の能力が必要となる。	2 人
中国には様々なスピーチコンテストがある。	2 人
短時間で正しく筋道を立ててスピーチをするのは母語でも難しい。	1 人
思考力を鍛えるのにいい方法だ。	1 人

一方、「あまり賛成しない」とする対象者は、学生によって好き嫌いがあり、スピーチ指導の科目の設置はスピーチに興味のない学生にとっては気の毒だということ、そして負担が重いため、学生が敬遠する可能性があることを理由に挙げ、授業ではなく愛好会のかたちのほうが良いとも述べている。

4. 3. 調査結果の考察

4. 3. 1. 各大学のスピーチ指導の取り組み

ほとんどの大学では日本人教師、または若手で新しく日本語指導に加わった中国人教師がスピーチ指導に当たっている。自大学の日本語学科をアピールする機会として積極的に取り組んでいると見てとれる。しかしそれであるなら何故、校内予選の前からスピーチ指導を始めなかったのだろうか。各大学の日本語科の責任者またはスピーチ指導の担当教員に聞いたところ、「スピーチは誰もがができるものではない。校内予選はスピーチの才能がある学生を発掘するためのイベントである。その前にスピーチ指導を行ってしまうと、誰が本当のスピーチの才能の持ち主なのか、逆に分からなくなる」という回答が多かった。校内予選の前にリハ

ーサルを行わなかったのもそのためである。

ここで言う「スピーチの才能」は文法や語彙などの語学力よりスピーチに特有な表現力を指している。これが、校内予選の前にスピーチ原稿の添削だけが行われた理由である。すなわち、スピーチに必要な表現力は短期間で鍛えられるものではない、表現力がもともある学生を選ばないと間に合わないという考えである。準備時間が非常に短い西北ブロック予選にとっては、やむを得ない措置だと言えるかもしれない。

対象者の在籍大学10校のうち4校は学内のスピーチコンテストを定期的に行われており、さらにそのうち2校は全員参加が要求されている。しかしながら前述のように、学内のスピーチコンテストおよび学外のスピーチコンテストの出場者選抜のための校内予選の前に、10校いずれもスピーチ指導を行っていない。校内予選を突破できなかった何人かの学生に校内予選に参加した意味と感想を聞いたところ、「恥ずかしかった」、「他の参加者との実力の差が実感できた」といったような自己否定の回答がほとんどである。

このように、スピーチ指導が学外のスピーチコンテストの出場者のためだけに行われるものだという固有観念が根強く存在している。学内のスピーチコンテストまたは校内予選が、優秀な学生を選出したと同時に、多くの学生を実際に傷つけてしまったという現実を、我々教員は認識すべきなのではないか。

4.3.2. スピーチ指導の効果

スピーチ指導の前作業としてテーマスピーチ原稿の執筆指導や添削があり、本作業としてテーマスピーチの指導と即席スピーチの指導がある。

テーマスピーチ原稿の指導について表5に示されたように、文法、始め方と締めくり方、構成に関して、指導の効果を感じている学生がそれほど多くなかった。文法に関して、出場時においては少なくとも2年間の日本語学習歴があり、相当上級なレベルに達していると考えられる。また、始め方と締めくり方、構成に関して、指導を受ける前に作文の授業で既に関連の知識を習得しており、ある程度の基礎ができていると

考えられる。一方、スピーチ特有の文体や決まった表現、事例の選び方と書き方、語彙の適切さに関して、指導の効果を感じている対象者が多い。スピーチ特有の文体や決まった表現、事例の選び方と書き方に関して、中国語スピーチと日本語スピーチが事例の扱い方、主張のし方においては大きく異なる¹³⁾ため、その差異についての指導が重点に置かれたと考えられる。語彙の適切さに関しては、辞書に載った表現や、母語干渉で中国語の単語をそのまま使ったことが多かった。スピーチ原稿の添削を通して自分の中間言語の深刻さに気づいたという出場者が何人かいた。

テーマスピーチの指導について表8に示されたように、表情の指導について効果を感じる学生が少なかった。これについて以下2点の理由が考えられる。(1) 校内予選を突破できた実力者だから表情の操作がもともとできる。(2) 日本語スピーチでは大げさに表情をつけることをそれほど求めない。大げさな表情をしなくてよいと何度も日本人教師に指摘され、もともとあった自信を逆に失ったという極端な例さえもあった。一方、話のリズム、聴衆の前で話す自信、アクセント・イントネーションに関して、指導の効果を感じる学生が多かった。

即席スピーチの指導について表9に示されたように、短期間で正しく道筋を立てることができない、緊張、適切な単語をすぐに思い浮かべることができない、の3点を即席スピーチが不得意な要因にされている。即席スピーチ指導を通して表10に示されたように、短期間で組み立てを考え簡潔且つ明瞭に話す能力、誤りを恐れないで話してみる勇氣、発音が難しい単語や表現を避けて分かりやすい言葉で言い換える能力が鍛えられた。一方、文法に気をつけながら話す（自己修正、長文の呼応）、理解されているかを確かめて話す（話のテンポ、反復）に関しては、指導の効果を感じる学生が少なかった。前者に関して、もともと文法の基礎が良いことが考えられる。後者に関して、もともとはその能力がなく、短期間の指導でそこに到達することが困難であると考えられる。

5. 西安電子科技大学におけるスピーチ指導の現状

5.1. 西安電子科技大学におけるスピーチ指導の背景

本節では、実際に大学の日本語教育の場で、どのようにスピーチ指導が行われているのか、一例として西安電子科技大学（以下「西電」と略称）での指導の状況を紹介する。

西電には日本語学科があり、1年生から4年生まで、およそ90人の学生が学んでいる。西電の学生が学外のスピーチコンテストに出場する機会は、年に2回ある。一つは本研究が調査している全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選で、もう一つは陝西省大学生日本語弁論大会である。前者は毎年5月に開催され、西電から1名の学生が出場可能である。後者は毎年10月に開催され、西電から2名の学生が出場可能である。西電では、これら二つのスピーチコンテストを目指して、スピーチ指導が行われることになる。ただし、西電のスピーチ指導は、スピーチコンテスト出場者のために行われており、普段の授業に組み込まれている訳ではない。

これまでに、全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選で入賞したことが1回（2009年、第4回、3等賞）、陝西省大学生日本語弁論大会で入賞したことが1回（2008年、第15回、第2位）あった。

5.2. 西安電子科技大学のスピーチ指導の試み

2011年までに、スピーチコンテストの開催通知が来てからスピーチ指導を取り組み始めるのだったが、近年の成績が良くなかったことを考慮し、2011年から、上記2大会開催のそれぞれの3ヶ月前に、「人文学院杯」学内スピーチコンテストを行うようになった。毎回の学内スピーチ大会で出場候補者を6名ほど選抜する。その後、2ヶ月間、日本人教師によるスピーチ指導を行う。そして、大会の開催通知が来てから、もう一度校内予選を開き、出場候補者の中より最終出場者を選出するという流れで指導を行う。

5.3. 西安電子科技大学のスピーチ指導の現状から浮かび上がる課題

2011年6月24日には、2011年10月開催の第18回陝西省大学生日本

語弁論大会の出場候補者を選出するための第1回「人文学院杯」スピーチコンテストを行った。17名（2年生8名，1年生9名）の出場者から6名（2年生4名，1年生2名）の出場候補者を選出した。その後，週1で，日本人教師によるスピーチ指導を行った。残念ながら，10月に開催予定の大会は政治の理由で取りやめになった。

2012年3月8日に，2012年5月下旬開催の第7回全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選の出場候補者を選出するための第2回「人文学院杯」スピーチコンテストを開催する予定である。原稿提出をすでに締め切ったが，応募者がわずか2名と，前回は大きく下回った。学生に聞いたところ，「出場しても既に2ヵ月の指導を受けていた前回の6名の出場候補者に勝てるわけがない」という理由で出場を諦めたのである。この考えは前回の6名の出場候補者の中にもあった。今度，出場を申し込んだ2名は，第1回「人文学院杯」の1位と3位で，その後のスピーチ指導でも大きく伸びていて自信がついていた学生である。第1回「人文学院杯」の2位と4位の学生は，4月からの短期留学が決まっており5月の西北ブロック予選に出場できないことを理由に，第2回「人文学院杯」の出場をやめたのである。第1回「人文学院杯」5位と6位の学生が応募しない理由については，スピーチ指導を受けていて他の出場候補者との実力の差を感じたからではないかと，担当の日本人教師はいう。このように，学生はこのスピーチ指導を口語能力のスキルアップの機会としてではなく，学外スピーチ大会への特訓としてとらえており，勝てなければ出場する意味がないと考えてしまう傾向があるようである。

西電日本語学科のシラバスによれば，その場で与えられた写真，文字資料または日常生活の一側面について継続的に発言できることが高学年『日本語口語』科目の教学目標となっている。しかしながら，『日本語口語』が『日本語会話』の延長線上に位置付けられ，独話の指導が行われていないのが現状である。

このように，現行のスピーチ指導の体制では『人文学院杯』スピーチコンテストを継続的に開催することが困難である。高学年学生の独話能力の欠如も考慮して，スピーチ指導を普段の授業に取り入れることが現

状を改善する良策ではないかと思われる。

6. 終わりに

本稿では、パブリックスピーキングの一要素としてのスピーチの指導を教育現場の普段の授業に導入する可能性を探るために、まず特定対象者向けのスピーチ指導の効果を調査し分析を加えた。

この結果、スピーチ指導を受けた対象者は、話す能力、書く能力、聞く能力が全面的に高められたこと、またそのなかで特にその場で与えられた話題についてまとまった発話をする、いわゆる「独話」の能力が大いに鍛えられたことが分かった。本来、この独話能力の育成は高学年『日本語口語』科目の教学目標の一つではあるが、教育現場ではこの教学目標がほとんど達成できていない。母語環境下においては、周りからの日本語のインプットが貧弱で、独学による独話能力の育成も困難であることが予測できる。スピーチ指導にあたっている担当者は、スピーチ技能を特別な才能ととらえ、どの日本語学習者にも必要な技能とは限らないととらえている傾向が浮かび上がったが、実際には、「就職活動の場で役立った」という回答もあったことから（表 13）、決して特殊な技能ではないことは明らかである。その意味では、スピーチ指導を普段の授業に取り入れることは有意義な試みではないかと思われる。

ただし、調査結果からも分かるように、学生に過重な負担を感じさせないことと、学生全員に独話指導の必要性を認識させ、効果を実感させることに注意を払う必要がある。そのために、綿密な授業計画の策定、効果的な授業方法の検討を行わねばならない。今後、スピーチ指導に関するニーズを抽出し、シラバスやカリキュラムに注意深く組み込んでいけるよう、取り組んでいきたい。

【付記】

本研究を進めるにあたり、一部に平成 22 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した総合的研究」（課題番号：22520525 研究代表者：深澤のぞみ、研究分担

者：三浦香苗，研究協力者：ヒルマン小林恭子，翟東娜）からの助成を受けている。

【謝辞】

本稿は、平成 22 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「語用例の文脈分析に依拠した上級作文教材一日中パラレルコーパスの活用」（課題番号 :21520570 大滝幸子）による研究会（2012 年 3 月 4 日）で発表を行い、参加者から有益なコメントをいただいた。ここに感謝の意を表する。

【注】

- 1) パブリックスピーキングの定義は、ヒルマン小林・深澤（2009）の「ある程度改まった場所で、一人の話し手が対象となる複数の聴衆に、自分の責任において自分の考えを論理的にまとめて伝えようとする」とする。
- 2) スピーチコンテストで一番有名なのは、国際交流基金などが主催する外国人による日本語弁論大会であろう
(<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/event/benron/index.htm>)。
日本国内では、その他にも県の国際交流協会などが主催するものや、大学などの教育機関が開催するものなどがあり、また国外でも同様に、教育機関や、地域ごとで開催されるものがあり、国レベルで開催されるものなど様々ある。
- 3) 香港，マカオ，台湾も含め，中国全土の学生が参加可能である。
- 4) 東北，華北，華南，西北，北京，華東，華中，西南の 8 ブロックである。
- 5) 第 6 回大会の西北ブロック予選には，陝西，甘肅，青海，寧夏，新疆の 5 省で計 17 校の大学は出場。うち，陝西省は 9 校，甘肅省は 5 校，青海省は 1 校，寧夏自治区は 1 校，新疆自治区は 1 校である。
- 6) 西北ブロック予選で 1 位の西安外国語大学の出場者は 2011 年 7 月 25 日に東京で行われた決勝戦に出場して審査員特別賞を獲得した。また，[*]が付いているのは所在地が西安ではない大学である。

- 7) 全国日本学士会、陝西教育国際交流協会主催。1994年に第1回が実施され、昨年までに17回行われた。本科組と専科組に分けて行われる。省内の10校前後の大学が出場する。
- 8) 1位の学生は陝西省大学生日本語弁論大会で入賞した経験がある。2位、3位の学生は半年以上の日本留学の経験がある。応募規定によってこの3人には出場の資格がないため、4位の学生は西北ブロック予選の出場者と選ばれた。
- 9) 1位の学生が日本への留学が決まり、西北ブロック予選に出場する気がなかった。
- 10) 10校のうち1校は日本人教師がいない。
- 11) 1週間に1回日本語学習者が集まって日本語で会話の練習をする学習活動の場である。参加が自由で、日本人教師や日本人留学生もよく参加する。日本語学科を設置している大学のほとんどで行われている。
- 12) 即席スピーチは、例えば、「福島原発事故は私たちに何を教えてくれたのか」や、「中国西北地区と日本の国際交流についての提案」や、「携帯電話とあなたの生活スタイル」など社会や文化に関連する6つのテーマから抽選でテーマが決まり、10分で構成を考えて、スピーチをするというものである。
- 13) 平たく言えば、中国語のスピーチは典型的な事例を取り扱い、ストレートな主張をする傾向がある。一方、日本語のスピーチはオリジナリティを重視しており、ストレートな主張を避ける傾向がある。

【参考文献】

- 泉元千春・魚住悦子展・熊野七絵・羽太園・三浦多佳史 (2005) 「まとまりのある話をするための教材の製作-『初級からの日本語スピーチ- 国、文化、社会についてまとまった話をするために-』制作の実践から-」『国際交流基金 日本語教育紀要』第1号, pp. 202-216
- 土岐哲 (2001) 「日本語のスピーチ教育」『日本語学』20 (6), pp. 6-10
- 林里香 (2010) 「留学生の口頭表現クラスにおける聞き手の役割」『授業実践開発研究』第3巻, 千葉大学教育学部授業実践開発研究室, pp. 53

- ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ (2009)「日本語のビジネススピーチの特徴と日本語教育への活用の可能性」,『JSAA-ICJLE2009 日本語教育国際研究大会 (オーストラリア ニューサウスウェールズ大学) 予稿集』, p. 123
- ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ (2010)「パブリックスピーキングのジャンルとしての日本語式辞スピーチの特徴」,『ICJLE2010 日本語教育世界大会 (台湾 国立政治大学) 予稿集』
- 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子 (2011)「日本語教科書における口頭発表指導について ―日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した基礎研究―」『金沢大学留学生センター紀要』第 14 号
- 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子 (2012)「日本語パブリックスピーキング能力養成のニーズを探るための基礎調査」『金沢大学留学生センター紀要』投稿中
- 藤岡典子 (2009)「スピーチコンテストでの評価が果たす役割-文化項目評価の作成過程を通して-」『国際教育評論』第 6 号, pp. 1-12
- 藤田朋世・フランブ順美 (2009)「ピア・ラーニングの概念を取り入れたスピーチコンテストの試み-重慶大学での実践報告-」『世界の日本語教育』19, pp. 199-213

要 旨

本文旨在考察将演讲指导引入到日常教学中的可能性。为此笔者首先针对有演讲大赛出场经历的学习者关于赛前指导情况、指导效果及当中存在的问题展开了采访调查。结果显示：接受演讲指导的学生在说、写、听这三个方面的能力均得到了不同程度的提高，其中尤其是围绕某一话题即兴进行持续讲话——“独话”的能力提高幅度显著。“独话”能力的培养是高年级《日语口语》科目的教学目标之一，但在实际教学当中这一目标并未实现。另外，与日本国内的日语学习者不同，中国的日语学习者生活在母语汉语的环境下，无法借助外部环境自学培养“独话”能力。因此，将演讲指导引入到课堂无疑是一个有意义的尝试。